アジア・キリスト教・多元性　現代キリスト教思想研究会
第 5 号　2007 年 3 月　37 ～ 48 頁

内村鑑三における愛と義の問題

岩野祐介

はじめに

筆者は今年度、キリスト教思想において社会性・公共性の土台として現代的な意味を持ち得るものとしての愛・隣人愛に注目し、内村鑑三を題材にその愛概念についての考察を行ってきた。これは内村の活動における車の両輪とも言える、社会に対する働きかけと聖書の研究との連関を明らかにするための考察の一段階でもある。内村による愛論の概略は次のようになる。

愛とは神の働きであり、神が愛の根源である。神の愛は人間の愛に先行しており、人間は神に愛されることにより他のものを愛せるようになる。神の愛は自己に向かってではなく、外に、他に向かって働く愛である。人間は、神から受けた愛に対して、他の人間を愛することによって応答する。現世にある間、神への愛を直接的に神に対して与えることはできないからである。

1．内村における義と愛

義と愛

このように内村は愛を多面的に理解している。愛には神の愛と人間の愛とがある。人間の愛とは情の愛、肉の愛であるとされる。しかし、神の愛を受け入れた人間による愛もまたあり、これは情の愛、肉の愛である人間の愛とは異なるものである、と彼は考える。人間の愛、情の愛は基本的に自己愛・自己の延長への愛である。故に自己中心的・独善的な側面をもっており、時に、愛のために義に反するような行為を人間になさしめる愛でもある。しかし、この情的な愛があるからこそ、我が子を犠牲とした神の愛の深さを、人間は感じ取ることができるということもまた確かなのである。自らの子供とは、情的な愛の対象として最も強く愛される存在だからである。そして、神の愛が媒介されることにより、情的な愛が増長し絶対化することを防ぐことが可能になるのである。(1)

しかし神のはたらきは愛だけではない。神は愛であり、神は愛の神であるが、同時に義の神であることをも忘れてはならないと内村は主張する。神の愛を人間の愛と同質の情的なものであると考えて、神は罪の自覚も悔改めの気持ちもないものでさえ情にほだされて赦すと考えるのは間違っており、躓きのもとである、と内村は述べるのである。神の愛は義を含む、義と共にある愛なのである。よって人間の愛、情の愛のように、愛のために義をそこねるようなことは決してない。

(1)　なお、人間の情的な愛を代表するものとして恋愛ではなく親子の愛を挙げている点は、西欧のキリスト教思想と若干異なるアジア的要素であると言えるかもしれない。

以上のような愛と義に関する内村の主張は少し入り組んでいるようにも思われる。また、義を強調したことが内村の厳格なイメージとも合わさって、内村が愛よりも義を上位においたとの印象を与えるかもしれない。本論文では内村における義と愛の関連を整理し、しばしば用いられる語でありながら、意味が曖昧なところもある「義」という語とは内村にとって何であったのか、を彼のテキストを通して明らかにしたい。

内村による愛と義

内村が「愛の神」と「義の神」という対比的図式を用いていたことは確かである。例として、次のようなテキストが挙げられる。

> 「然らば仏教基督教の相違は何処に在る乎と云ふに、…主として愛の観念に於てである。…弥陀の慈悲が慈悲のための慈悲であるのに対して、キリストの愛は義に基づける愛である。基督教の神は義の神であって、義に由らざれば人の罪を赦さず、義に由らざれば救を施し給はない。其意味に於て弥陀の慈悲は単純であるがキリストの御父なる真の神の愛は複雑である。」(2)

この阿弥陀の慈悲に対する内村の理解が果たして妥当であるのかどうかは別として、内村がキリスト教における神の愛とは、単に赦し愛する愛だけなのではなく義と共にある愛である、と解釈しているのは確かである。ここで注意して欲しいのは、内村が神に関して、愛と義という二元論的な論理ではたらいているものだ、と考えているわけではないことである。つまり、キリスト教の神は「愛の神」であり「赦す神」である、との側面のみから神を理解しようとするのは間違っている、と述べているのであって、義の重要性を主張することにより愛の働きの相対的位置を低めようとしているわけではない。むしろ、神において義と愛とが分かち難く関わりあっていることを述べているのである。人間との関係からこのことを捉えなおせば、悔い改めと救済は分かち難く結びついている、ということになるであろう。では、ここで言われる義、キリスト教の神の義とは、内村にとっていかなる概念なのであろうか。

義という用語の問題

「義」とは、キリスト教的な意味を表すようになる以前に、漢字、漢語として長い歴史を持つ言葉である。そこで少しばかり righteousness、dikaiosynē、justitia の訳語としての「義」について確認しておこう。

---

(2) 内村鑑三「仏教対基督教」1929、『内村鑑三全集 32』217 頁。(『内村鑑三全集』1980-84 年、岩波書店刊。以下『全集』と表記) なお内村の文章にはしばしば各種傍点やゴシック体等により強調されている個所があるが、本論文内の引用文では、それらの強調は一部を除いて再現していない。また、基本的に旧字体をそのまま用いた。

(3) 鈴木範久『聖書の日本語　翻訳の歴史』(岩波書店、2006 年、) 23 頁。

鈴木範久によれば、すでに漢訳聖書において、義という表現が用いられている。例えば18世紀はじめに訳されたと考えられている『四史攸編』に、義という字の用例が見られるという。[(3)] つまり、聖書で言われる義に対して、東アジア漢字文化圏で使用されてきた義という字をあてることについては、それなりの歴史がある、ということになる。[(4)] 鈴木や海老沢有道らの研究を概観すると、Godに対する「神」やloveに対する「愛」のような訳語が確定するまでに多くの議論がなされたことと比較して、「義」は比較的受け入れられやすかったのではないか、との印象を受ける。[(5)]

もちろん、東アジア漢字文化圏での伝統的、あるいは辞書的な意味において、義とは正しさである。例えば筆者の手元にあった辞書では、「義」は次のように定義されている。「ぎ【義】 1 五常（仁・義・礼・智・信）の一つ。他人に対して守るべき正しい道。物事の道理にかなっていること。道義。[(6)]」ここでも道義と置き換えられているように、義という字はそれ単独では、かなり広い意味合いを持つ字であり、指すところの意味が曖昧になってしまう。神の義という語の意味がどこかはっきりしないのもそのためであろう。内村もまた義について、「正義」「正しい関係」といった換言を行っている。よって、基本線において義が正しさであることは間違いない。しかし「神」が本来God、Deusを指す言葉ではなかったように、「義」も本来righteousness、dikaiosynē、justitiaを指す言葉ではなかったはずである。内村がどのような意味合いで義と述べているのかについても、慎重な検討が必要であろう。あるいは、内村がこの言葉を用いる際に、儒教的なニュアンスが入り込んでしまっていることもあり得ることである。

この、内村にとって「義」という語が一体どのような意味合いをもっていたか、との問題について考える上で手掛かりとなり得るのが、彼がキリスト教を身につけた過程である。よく知られていることであるので改めて詳しく述べることは差し控えるが、それは内村の札幌農学校時代のことである。内村は札幌農学校に1877年から1881年まで在籍しており、その間の1878年に宣教師ハリスから受洗している。この時期はちょうど聖書の日本語訳が進行している時期とも重なっている。まず新約聖書から翻訳されたが、その翻訳が終了したのは1879年のことである。ということは、この時点で日本語訳聖書はいまだ一般的なものではなかったはずなのである。さらに札幌農学校の教育が全て英語で行われており、内村は新渡戸ら級友に送った手紙でも英語を用いているほど英語には不自由していなかったこと等を考えると、内村が英語の聖書・英語の文

(4) なお、キリシタン時代にはジュスチイサ（iustica）とカナ表記されている。

(5) 鈴木は前掲書、海老沢有道は「日本の聖書」（講談社〈講談社学術文庫〉、1989年）、等で翻訳・訳語の問題　を取り扱っているが、中国において、Godの訳語をどうするかという問題が政治的要素まで含んだ大きな　問題であったことに比較すると、「義」の取り扱いは目立つものではない。日本語訳において、この漢訳聖　書が大きな影響をもっていたことは両者の強く主張するところである。

(6) Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) ©Shogakukan 1988/ 国語大辞典（新装版）© 小学館 1988

(7) 例えば渋谷浩は、「…札幌農学校入学以来、即ち一六歳の時から（あるいはもっと早く、東京英語学校入学のころから？）儒教的教育はふっつり断たれ、西欧思想が、それも札幌ではキリスト教信仰が彼の頭と心に激しい勢いで流れ込んでくるのである」と述べている。
（渋谷浩『近代思想史における内村鑑三』新地書房、1988年、126頁）

献を通してキリスト教やキリスト教思想を身につけた、ということは十分にありうるのではないかと思われる。[7] つまり内村は、そして内村に限らず明治初期のキリスト者は、「義」ではなくrighteousness といった語によって神の義という概念を学んだわけである。もちろん漢字文化圏における伝統的な「義」との類似性を考えたからこそ、神の義という用語が確定したということは確かであるが、彼ら明治初期のキリスト者がキリスト教に魅力を感じたのはそういった伝統的な概念・思想に限界を感じていたからだ、ということも忘れてはならないであろう。彼らが「日本的キリスト教」を標榜しているからといって、アジア的・日本的概念を無自覚に導入していると考えるのは早計である。

ただし内村はこのような用語の意味を厳密に確定した上で議論を展開するというタイプではない。部分的に言葉だけを取り出してみれば矛盾して見えることもあり得る書き手である。よって、前後の文脈にも注意を払う必要がある。

２．人間の義と神の義

内村における義

義・正しさについて内村が述べる場合、そこには主として二つの文脈が見受けられる。愛について語られる場合と同じように、人間の義と神の義の二つである。

人間の義とは、人間対人間の義である。これは人間対人間の正しい関係性ということであるから、人道としての道義、あるいはいわゆる正義、社会正義等と考えることができる。例えば内村の日清戦争に関する言説の中で語った義などがこれにあたる。日清戦争の開戦に際して、内村が支持する立場に立ったのは、これが「義戦」であるとの政府による謳い文句を彼が信じたからである。特に社会進化論的な歴史観を持っていた当時の内村にとって、先に近代化を果たした日本が人々を解放するために中国の近代化を促進することは充分な大義名分となったのであった。しかし内村は終戦後、それが単なる「欲戦」であったことを目の当りにして、自らがこの戦争を支持したことに関して猛省した[8] のである。

このような人道的な義とは、自然法的・普遍的なものであるとも言えるであろう。よって、特にキリスト教的な義、ということにはならない。むしろ人道的ということは、まさに人間対人間の関係において正しい、ということであって、それは神との関係とは別問題であるということにもなる。日清戦争が、そしてあらゆる戦争が義でない、ということについては、キリスト教思想を経過しなければ判断できないというものではないはずである。事実、日露戦争に際して非戦を唱えたのは内村のようなキリスト者だけではなく、宗教ということに関しては正反対であった幸徳秋水等の社会主義者たちも同様に非戦をとなえたからである。

しかし内村には、そのような人道的な精神の土台としてのキリスト教信仰がある。人間の義を支えるものとして神の義をもっているのである。人間対人間の義、正しさは畢竟相対的なもので

(8) 例えば「余の従事しつゝある社会改良事業」（1901 年、『全集９』、479 頁）では「…余は良心に対し、世界万国に対し、実に面目なく感じた、余は余の筆を揮ふて日本人の罪悪を幇助したことを悔ゐた、余は爾来一切明治政府の行動に就て弁護の任に当るまいと決心した」と述べている。

しかあり得ない。そこでの正しさとは相対的なものであり、正しいものは何か間違っているものに対して正しい(逆に間違っているものはなにか正しくないから間違っている)のである。ゆえに、このような相対的な正しさではなく、絶対的な正しさを見出そうとするならば、人間を超えた神に頼らざるを得ない、と内村は考える。もしも完全に人間の世界に限られた思想、例えば儒教的、あるいは武士道的な義を想定し、そこで絶対的な義・正しさを求めるとすれば、それは上位にある人間が絶対的に義であることになり、臣下は主君に身命を賭して仕える、といったことになりかねないであろう。滅私奉公である。このように人間のための義は、ときに人間を縛るものとなる。さらに、内村が日清戦争を当初は「義戦」であると認めたように、義、大義名分は時に戦争という非人間的行為を容認し推進する動機にさえなりうるのである。一度戦争が大義名分を得てしまえば、道義的な面から平和主義を導き出すことは困難になるであろう。しかし内村はキリスト教的な視点を手に入れていたことにより、そこから脱却し、周囲の状況にとらわれず、個人としてのあり方を模索することができたのである。

なお、神の義とは言うものの、一方の当事者はやはり人間である。つまり神の義とは、実質的には人間と神との義なのである。義とは正しさであるから、人間と神との義とは、すなわち人間と神との正しさ、人間と神との正しい関係、ということになる。無論、神の正しさに関しては人間の側でどうにかできるものではないので、この場合問題となるのは、人間の側の、神に対面しての正しさ、人間から神へと向かう関係性の正しさ、ということである。

人間の義

それでは以下、まずは義とは何か、ということについて、内村のテキストを確認してみよう。題材は 1922 年の「義理と人情」である。

> 「〇義理人情と称して義理と情とを同一視するは大なる間違である、義は正義であり、理は道理であり、情は人情であつて各々別である、…
> 〇然らば三者孰れが最も肝要である乎と云ふに、第一は正義である、…正義は知識よりも、亦情義よりも貴くある、…
> 〇如斯くにして情は天然性であり、理は修得性であり義は信仰性である、…
> 〇人性の問題を解決するに方(あたつ)て、第一に考ふべきは正義である、第二が道理である、第三即ち最後が人情である、此順に従つて解決せん乎、万事は容易に解決せらる、義しき乎義しからざる乎、若し義しくば骨肉、社会、国家が悉く反対するもこれに従ふ、若し義しからずば全世界が我に迫るも之に循はない、問題は簡単明瞭である、利益、情実、便宜の問題でない、…
> 〇…而して此世の人は、殊に日本人は何を許しても不人情を許さない、彼等は義人を貴むと称するも、義人は敬して之を遠ざけ、神として祭りこみ、遠方よりこれを拝む、其点に於て信者も不信者も別はない、…神の人は義の人である、預言者はすべて義の人であつた、イエ

(9) 内村「義理と人情」、1922、『全集 27』 178-181 頁。

スも亦其一人であつた、…」[9]

このように、内村はまず義とは正義、正しさであると述べた上で、さらに義は信仰に基づくものであり、また世俗的な問題に関する判断の基礎もこの信仰に基づく義でなければならない、と主張するのである。人間の義、世俗的な義は、神の義、信仰による義を土台として成り立つ。別の言い方をするならば、神との間に正しい関係をもつことにより、人間に対しても正しくあることができるようになるということになる。預言者は義の人であり、神の言葉を語り、社会正義の実現を要求する、と内村は言うが、彼等は義人だから神の言葉を預かったのではなく、預言者となることにより義人となったのである。パウロもロマ書 3:9 で言うように、（もともとの）義人など一人もいないのであり、人間は信仰により義とされるのみである。義、すなわち神との正しい関係を持つことができるのは、信仰の結果なのである。

では何故に人は信仰を抱くのであろうか。次節ではその問題とからめ、神の義について確認する。

神の義

続いて、神の義、神対人間の義に関して、具体的に内村のテキストを見ていきたい。1923 年の「義の意義」において、内村は次のように述べている。

> 「浅薄なる基督信者は云ふ、「義は人の罪を発(あば)いて彼を審判く事である」と。決して然らずである。義は人の神と人とに対する義(ただ)しき関係である。…神は人の罪を赦すに義に由て赦し給ふ。人を恵むにも亦義に由て恵み給ふ。…神も神の人も唯は赦さず、唯は恵まない。誠に唯赦し唯恵むは最大の無慈悲である。義の要求する赦しの条件は罪の悔改である。恵みの条件は信頼である。絶対的の愛と称して悔改めざるに赦し、信ぜざるに恵むは愛に非ず亦恩恵に非ずである。」[10]

このように義とは正しい関係、あるいは正しい関係を求めることであると内村は説明する。ここで言われる正しい関係とは、人間が神に対して自らの罪を悔い改めて許しを求め、そして神を信頼することである。イエスは、律法の中で最も重要なものとして「なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡して主なる汝の神を愛すべし」[11] という教えを挙げている。これは、ここでの内村の言葉による「悔改めそして神を信頼すること」に相当すると考えてよいのではないか。

ここで内村が、「神は人の罪を赦すに義に由て赦し給ふ」、「義の要求する赦しの条件は罪の悔改である」と述べていることに注目したい。「義に由て赦し給ふ」ということは、人間が正しくなければ神は赦さない、ということではない。罪人であることの自覚と、それを悔い改め神に頼

(10) 内村「義の意義」、1923 年、『全集 27』 451 頁。
(11) マタイ 22:17、文語訳聖書より。

る気持ちとがあるならば、神は人間を赦す、ということになるのである。「義のない愛に意味はない」と言われるとき、義の方が愛より重要であると内村が考えているようにも思われる。しかし、このように罪人を罪人であるままで、しかも自らの子を犠牲としてまで救おうとする神は、やはり人間に対する深い愛をもっていると内村は考えているのである。ゆえに、自らを愛する神を愛することが、神と人間との正しい関係、義となるのである。自分はそのような神を愛そうとしないまま、愛されて救済にはあずかりたい、というのは、自分だけが愛を要求しようとする態度であって、正しい状態、義ではないのである。内村は、神の無制限（対象がすべての人間に向けられるという意味で）な愛が、無条件な（悔改めないでも赦されるという意味で）愛であると誤解されてはならない、ということを主張しているのであり、これは裏を返せば、内村にとって自らが、そして人間全てが罪人であるとの意識が極めて深いものであったということに他ならない。

このように考えると、悔い改めが赦しの条件であるようにも思われる。となると、人間の悔い改めが先行して救済されるようなことになり、あたかも行いによって赦されることになるかのようである。これは内村の主張する、神が全てにおいて先行するということに反するようにも思われるが、結論を述べればそうではない。内村が強調しているのは、神の義とは人間の罪を裁き、人間に悔い改めの余地がないような決定的な罰を与えるものではない、ということであり、また「いずれにせよ赦されるのであるから、人間のあり方はどのようでもよい」というわけではなく、罪の自覚とその悔い改めが必要であること、である。罪人は罪人のまま赦されるが、その罪がそのままで、自覚も反省も向上心もなくていい、というわけではない。言い換えれば、裁きも赦しも一回的なことではないのである。人間は赦されて、自らの罪深さを改めて知ることになる。人間は自らを完全にコントロールすることはできない、不完全な存在だからである。ゆえに躓きを体験し、そしてその都度悔い改め神に頼る気持ちを起すのである。そして、人間は罪深い自らを赦そうとする神の愛の偉大さを改めて思い知ることになり、それに応答せずにはいられないはずである、と内村は考える。人間は神に似せられて造られたものであり、神への志向を持っているとされるからである。

そのような人間は、神から与えられた義、正しさを、人間世界の中でも現実化することにより、神の愛の深さに報いることができるようになる。そのように考えるとき、人間の義とは神の愛（義を含む愛）への応答であるとも考えられ、またこのような人間に対する神の働きを愛と義とに区別・分割することの困難さもまた顕わになるのである。「神の愛」という時に、その愛に既に義のはたらき、人間を神との正しい関係へと方向付け、さらに人間世界で正しい振る舞いをさせようとする働きが含まれることになるからである。この神のはたらきについては、後の部分で再度扱うことにする。

このような義に対する理解は、聖書理解の伝統、キリスト教思想の伝統の中では決して新しい

(12) 内村が札幌農学校に入学したのは、既にクラークが帰国した後であった。内村はクラークが残した「イエスを信じるものの誓約」に署名したのであって、直接指導されたわけではない。ただし内村は渡米した後、アメリカでクラークに対面している。

ものではない。パウロからルターへと至る、人間の罪を重く捉え、十字架上のキリストによる贖罪を重視する流れと極めて近いものであると思われる。これは、彼が贖罪信仰を体験的に確立した中で身につけたものであると考えられる。

内村鑑三が直接的に影響されたキリスト者といえば、札幌農学校時代の上級生たち（彼等はクラークの感化を受けていた[12]）や、アメリカ留学時代のアマースト大総長・シーリー等が挙げられる。クラークは札幌農学校でキリスト教を伝道するにあたり、教派性にこだわらない態度をとった。しかし彼はピューリタニズムの色が濃いマサチューセッツ州の出身であり、事実クラークが札幌農学校に残したキリスト教も多分にピューリタニズムなものであったと思われる。内村の残した農学校時代に関する文章からもそのことは見て取ることができる。

これに比べると、シーリーが内村に教えたことはよりパウロからルターへの流れに近いものであったのではないか、と思われる。徳を積むことではなく、ただ十字架上のキリストを仰ぎ見ることにより人間は救われる、との教えは「信仰のみ」の思想に近いものだからである。アマースト大学はピューリタニズムの影響が強いニュー･イングランドの長老派系大学であるが、シーリー自身はドイツ・ハレ大学への留学経験がある。[13] あるいはそこでルター主義の影響をうけたのかもしれない。内村はシーリーを通して間接的に、かつ体験的に敬虔主義的な信仰を身につけたということができるであろう。

そこで次節では、まずはルター、続いてパウロに関する内村の文章を検討し、彼らから内村が学んだ義について検討してみよう。

３．内村の義とルター、パウロの義

内村とルター

内村はしばしばルターから受けた影響について表している。彼は、「主イエスキリストを除て、私の心に最もちかい者は使徒パウロと聖アウガスチンとルーテルとであります」[14] と述べ、ルター、アウグスティヌス、パウロが彼の信仰の仕方の手本であったことを示している。さらに、「殊に三人の中でルーテルは時代的に最も近い者でありますが故に、私は彼に対し特別の親密を感ずるのであります」「ルーテルに就て語るは多くは私自身に就いて語ることであります」と、ルターへの敬愛を明らかにするのである。

内村がルターについて詳しく論じたものとしては、『全集 17』に収められている「ルーテル伝講話」と、『全集 23』に収められているルーテル記念号（宗教改革 400 年）掲載の諸著作とがある。前者はタイトル通り基本的にルターの伝記的内容であって、その思想を解説したものではない。一方後者は、ルターの思想そのものというよりは宗教改革という運動とその後世に与えた影響に着目した側面が強いものではあるが、義認については中心的テーマであるため、繰り返し取り上げられている。その一部を引用してみよう。

(13) ハレはかつてルター主義的敬虔主義運動の中心地であった町である。
(14) 内村「ルーテル伝講話」1910 年、『全集 17』、389 頁。

「ルーテル以外の宗教家は（多分我国の親鸞上人を除いては）信仰を補ふに多少道徳を以てした、…然れどもルーテルは大胆に爾か断言したのである、人の救はるゝは行為に由らず信仰にのみ由ると、而して彼は此真理を発見して真の自由と平和と歓喜とに入つたのである、聖書は始めより終りまで信仰の書である、…信仰の立場に立て見て聖書は一の調和せる完全体として見ゆるに至るのである、…罪人は信仰に由て罪其儘、善なく義なく愛なく、汚穢其まゝ、疵其まゝ神の愛に入ることが出来るのである、…」[15]

ここで、義であるということは何を意味しているであろうか。若きルターの心を占めていたのは「人は如何にして神の審判の前に立ちて無罪なるを得るか」[16]という問題であった、と内村は述べている。とすれば、義であるとは、無罪である、罪人でない、ということになる。罪人のまま、義もないまま、でありながら、裁かれて否定されるのではなく神の愛に入ることができるという意味では無罪、義であることになるわけである。罪人ではあるが、神と正しい関係性にあるという意味で義なのである。そしてひとたび義とされ神の愛に受け入れられた人間は、やはり罪人であり続けながらも、神の愛に応えるべく、義であろうと努力するはずである、と内村は考える。「汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」[17]とある通りである。もちろん人間が自力で完全な存在になることができるはずはなく、それはすべて神の働きであるわけなのだが、そのように完全であろうと願い、神にすがろうとする人間の受動性・感受性については、内村は一定の評価をおいていると考えられる。以下にこのことを内村のテキストを通して確認しておこう。

「義とし給ふとは義人として宣言し給ふと云ふことではない、…

義とし給ふとは一に義と成し給ふとのことである、即ち義しき心を罪人の衷に造り給ふと云ふことである、…彼は悔ひたる罪人のために聖き心を造り、その衷に直き霊を新たに起し給ふ（詩篇五十一篇十節）、…

義とし給ふとは又義として顕はし給ふと云ふことである、即ち衷なる義に適ふ外なる装を以てし給ふと云ふことである、神に在りては人の救済は彼の全性の救済である、即ち彼の霊と体との救済である、…義人は何時までも神の前にのみ隠れたる心の義人として立つべき者ではない、…神が彼を義とし給ふと云ふ事の中には彼の終局の栄達も含まれて在るのである。

…勿論、衷に義とせらるゝは先きであつて、外に義とせらるゝは後である、…」[18]

この「全性の救済」、義人としての完成は、終末的な出来事である。すなわち、完全なものとして、復活の体を与えられるのである、と内村は続ける。

(15) 内村「ルーテルのために弁ず」1917 年、『全集 23』、361 頁。
(16) 前出「ルーテル伝講話」、405 頁。
(17) マタイ 5:48、文語訳聖書より。
(18) 内村「義とし給ふとは何ぞや」1908 年、『全集 15』、420 頁。
(19) 同前、421 頁。

「義者の甦り（路加伝十四章十四節）と云ふは此事である、即ち義人が再び体を以て顕はれ、其外形上の報賞に与かると云ふことである、…義人栄達の時期、是れが復活である。

是れが完全なる救済である、…義とせられたる者が栄を賜はりて救済は完全うせらるゝのである、…」[19]

以上のような、義とされることと完全な救済の関連、そして人間だけでなく自然万物をも含んだ全体的な救済の完成の理解について、内村はパウロの文書を通して身につけたところが大きいと思われる。そこで次節では、内村がパウロ書簡に関連して義について述べた箇所を検討してみることとしよう。

パウロ書簡での神の義

内村はパウロ書簡について実に多くの著作を残しているが、ここでは 1921-22 年の「羅馬書の研究」を取り上げることにする。本書は内村によるパウロ書簡に関する著作の中で、質量ともに頂点を成すと言われるものだからである。例えば李慶愛は、これを「アマスト以来の内村のキリスト教信仰の集大成」と称する。[20] 全 59 講にわたるこの著作の中で、内村は「神の義」とのサブタイトルのもと、４講分の分量を割き、ロマ書 3:21-26 について講じている。

この「神の義」の中で内村は、神の義とは人間によるものではなく「神より人に賜ふ義」と述べた上で、次のように説明している。

「空気や日光は人の生存に欠くべからざるものである、しかし人力を以て造り出すを得ざるものである、されば造物者より与へられてそれを我物とする外に道はない、神の義も亦これに似たるものである、…」[21]

このように内村は、神の義とは何か特殊な恩恵と言うよりも、空気や日光のように万人に当たり前のようにあたえられるものである、と語る。だが、当たり前のものといっても、空気も日光も内村が述べる通り人力では作り出せず、しかもそれがなければ生きていけないものである。つまり信仰とは、内的・精神的で、非日常的な特殊なものなのではなく、日常生活に欠かせない当たり前な、普通なものである、ということになる。ただし、万人に与えられるとはいえ、無条件ではないのは、先に確認した通りである。

「…此義を我物とするは信ずる者に限るのである、万人の取るを目的とし万人の取るに任されたる生命の水ではあるが、之を取らんと欲して汲器を持ち来る者にして初めて之を実得

(20) 李慶愛『内村鑑三のキリスト教思想』（九州大学出版会、2003 年）157 頁。
(21) 内村「羅馬書の研究」1921-22 年、『全集 26』、168 頁。
(22) 同前、172 頁。

し得るのである、…」[22]

そして、このような神の義は、神の愛と別に存在しているのではない。繰り返し確認してきたように、人間を義とするのも愛のはたらきである。

「神は実に悔いし砕けたる心を愍み給ふて義を其人に賜ふのである、…」[23]

この神の愛は無制約にはたらくものではなく、義を基準としてはたらくものである。内村によれば、神は神の義によってしばられているのであり、それは「一国の主権者が自から憲法を立てゝ此憲法に縛らるゝ如きもの[24]」なのである。

「…此公義ある以上神はたゞ罪を赦すことを得ない、罰は当然伴はれねばならぬ、換言すれば神は義を以って人の罪を赦す外はない、…
…義のためには罰せねばならぬ、愛のためには赦し度しと思ふ、…神は「その生み給へる独子」を世に遣はし、彼を十字架につけ、彼にありて人類の凡ての罪を永へに処分し、以て人の罪の赦さるゝ道を開き、我等彼を信ずる者は彼にありて罪を罰せられ、彼にありて義とせられ、彼にありて復活し得るに至つたのである、…」[25]

このようにして、贖罪信仰と神の愛、神の義、そしてキリストの十字架が繋がることになるのである。

さらに、前述したように、内村によれば義とされることは、完全な救済の中の一段階でもある。このことを内村のパウロに関するテキストから再確認しておこう。1912年の「パウロの救拯観」で、内村は次のように論じている。

「…人の救拯は三段の順程を経て行はるゝのである、其第一が義とせらるゝ事である、…神と義しき関係に入る事である、彼に子として扱はるゝに至る事である、…之に次いで聖くせらる事が来る、…神より聖霊を受けて聖善の諸徳を我霊に植附けらるゝ事である、…之に加ふるに身体の救拯を以てせられなければならない、而して聖められたる霊魂が死なざる壊ざる体を衣せられ、茲に再たび体を具へたる完全なる人となるに及んで、救拯は完全に遂行せらるゝのである、…」[26]

身体の救済が終末的なことであるとしても、義とされることに関してはこの世において各々の

(23) 同前、167頁
(24) 同前、190頁。
(25) 同前、190-191頁。
(26) 内村「パウロの救拯観」1912年、『全集19』、309頁。

信仰者が実感できることであり、そうして義とされ罪を赦されることにより、そのような神の愛へと答えようとする意志と心が生ずる。それが聖化へとつながるものである。また具体的な行動としては、他の人間に対して正しくあることへとつながるのであり、それは隣人を愛することに他ならない。社会正義、隣人愛と神の義なる愛（義をその内に含む神の愛）とは切り離せないものであり、また自らの救済を確信することによる神への信仰を失った社会正義や隣人愛は、結局人間を苦しめる偽善的な空しいものとなる。

ゆえに、神の義ということは厳しく恐ろしい結果をもたらす裁きではなく、人間を赦し、救い、完全な存在とするためのものであることになる。さらにこの信仰を通して、将来への希望、差し当たっては明日への希望を人間に与えるものなのである。

まとめに代えて

そもそも義が正しさであるならば、「正しい何か」という言い方に実質的内容はあっても、「正しさそのもの」は概念的なものであって、実質を伴わないのではないか。内村がルターから受け継いだ義の概念が関係概念であるとすればなおさらである。愛が、愛すべき対象があってこその愛であるように、義もまた正しくあるべき関係性があってこその義である。まず関係があり、関係を構築する当事者があってはじめて、その関係の正しさということが言えるのである。正しさそのものが関係性を築くということは考えにくい。内村による義の強調を、あまりに厳格主義的であり赦しがないと批判することも可能ではある。その厳しさについていけず、彼の元を去ったものも少なくはなかった。しかし、内村がどのような関係性を前提として義を強調したか、ということを見落としてはならないのではないであろうか。

キリスト教の特徴を義と愛とした場合、あるいはキリスト教の神の特徴を義の神と愛の神という二つの側面であらわそうとした場合、内村鑑三といえば、義にまつわる部分を強調したキリスト者であると捉えられることが多いのではないか。また彼の持つ頑固一徹で厳格な、預言者的な部分もそれを後押しする。しかし、その義とはなにか、という部分に関しては、自明なものとされ、意外と語られてこなかったようにも思われ、また内村自身も必ずしも詳細に議論しているわけではなかった。今回内村のテキストを検討して明らかになったことは、神の義は愛と共にはたらく、あるいは神の愛は義を含むものであるということであり、また人間の救済とそこから生ずる大きな希望のために、重要な役割をはたすということであった。内村が強く主張する義は、基本的に誰かを断罪するためのものではなく、神との正しい関係に入り、救われるためのものだったのである。

（いわの・ゆうすけ　京都大学大学院文学研究科博士後期課程）